

白川静のことば

《12》



金子都美絵・画

長・老は、いずれも長髪の人をいう字である。いまでは若い人に長髪のものが多い。古い時代には、長髪の人は、神につかえるものであった。若は長髪の巫女、微も長髪の人を撃つ形であるらしく、撃たれているのはあるいは媚女であろう。媚女を伎つ蔑は、また微と同音で、同じく否定詞にも用いられる字である。

老年を意味する字には、老の形に従うものが多い。耆・壽（寿）・考はみなその形に従う。下部はいずれも音符である。このような関係にあるものを、『説文』には転注とよんでいる。孝は会意字であろう。老年者が尊敬を受けていた時代の字である。長老を叟という。三番叟の叟である。古くは廟中に火を執る形に作る。ゆえに搜（搜）の字は叟に従う。ローマの家父長を思わせるような字である。ローマでは聖火を守るものは父であったが、わが国では家刀自がいろりを守り、坐を定めた。

『漢字』岩波新書 p178)

